Q&A コーナー

Q. 「信徒の時代」と言われていますが、どのようなことなのでしょう。②

A. 「信徒の時代」といえば、信徒だっているいろいろなことになった、とか、いろいろなことをしなくてはならなかった、とか：そういう風に考えてしまいます。具体的な行動について考える前に、もう少し《土台》について考えてみたいと思います。それは「教会は交わり」という考え方です。

「信徒の召命と使命」には次のように書かれています。「普遍的な広がりをつねにもちつつ、教会的交わりがもつとも直接に、またもつともはつきりと表されているのは小教区においてです。地域的な教会が小教区です。そしてある意味では、「社会のただなかに生きている」ものこそ教会なのです。信仰の光のうちに、小教区の真の意味を再発見する必要があります。…」（26番）。つまり、わたしたちが普段使っている「小倉教会」とか

「黒崎教会」とか「〇〇教会」と呼んでいる教会は、厳密には「小教区」と言われます。

信仰の光のうちに、その真の意味を発見しなければいけない、というのです。どういふことでしょうか。そして、教会的な交わりとはどういう交わりなのでしょう。

文書は続けます。

「たとえ、ときとして人員や資力に欠けているとしても、ときとして広大な地域のなかに孤立し、あるいは雑然とした現代の街のただなかに埋もれているとしても、小教区は教会の神秘が存在し、生きているところなのです。小教区はある構造や区域、建物といったものではなく、むしろ、『一つの心に結ばれた兄弟の集まりとしての神の家族』、『親密で、だれをも受け入れる家庭』、『信じる者の共同体』なのです。つまり、小教区は感謝の祭儀を中心とした共同体なのです。」

小教区（教会）の真の意味は：キリスト者がキリストのいのちと結ばれ、信者同士が愛によって結ばれているということ。

文書に第二バチカン公会議

直後の教皇パウロ六世の言葉が引用されています（19番）。

「教会は交わりです。…教会とは、『信徒の交わり』を意味しています。この交わりは、二つの生きたかかわりをしていきます。すなわち、キリスト者がキリストのいのちと結ばれていること、この世と次の世において、信者が一体となって愛の交流のうちにあるということ。それは、キリストによるキリストとの一致と、教会のなかでのキリスト者同士の一致です」。

引用でくどくなりましたが、わかりやすく言うと、次のようになります。

信者の生きる力、活動の源は聖体祭儀（ミサ）にあるということ。聖体祭儀におけるみ言葉と聖体の拝領によって信者はキリストとの交わりに引き入れられ、キリストと一体となる。さらに信者同士が愛の交わりの中に包まれる。

信者の活動の源泉はここにある。教会は単なる社会的な団体ではなく、ましてや「好き嫌い」などの感情で集まっ

た仲間でもない。同好会のようなものでもありません。教会がキリストが望んでいる真の教会かどうかのチェックポイントがあります。

聖体祭儀を大切にしているか。司祭はみ言葉が信者にとって真に生きる力となるような説教を用意しているか。教会に集う者が互いに尊敬し合い、その気持ちが「挨拶」などで具体的に表れているか。だれをも受け入れる家庭のような集いなのか。次回に続く。（行橋教会・山元真神父）